

座談における話題の転換

小林 美恵子

1 はじめに

筆者は鈴木家、内藤家それぞれの座談会の司会者として、この共同研究にかかわった。その立場から、小論では、これらの座談において話題の進行と転換がどのように行なわれているか、また座談の参加者がそれらにどのようにかかわっているかを確認し、それぞれの参加者の立場（年齢、性別、家族内での位置など）と話題の転換における役割との関連性を見てゆくこととする。

小論では「座談」を3人以上が一空間に会し、ある話題について会話を進めていくものとする。その際、司会者をたて、司会者が一定の方向に話題を定め、一々の発言者を指示する形で進めていく、いわば「会議」型のものから、特に司会者などを置かず、おのおのが思いつくままに発言することによって話題がおのずと進行、転換していくような、いわば「雑談」型のものまで、「座談」とは一口で言っても、さまざまな形があり得るだろう。今回の二家族の座談会において、筆者は司会として、先にあげた二つの型の間で話を進めることを余儀なくされた。すなわち約2時間という限られた時間のなかで、「女性の話しことば」「世代による話しことばの差」「ことばのしつけ」などいくつかのテーマについて、それぞれの意見を聞き、また録音を聞いたり、写真をみたりしての意見も聞くという点からは、話題を司会者が提起し、話がそれた場合には軌道修正をし、参加者のうちの誰かを指定して発言をうながすということもあり、「座談」は「会議」型にならざるを得ない。いっぽう、この座談会の目的として各人の話し方や話の運びについてできるかぎり自然な資料をほしいということもあり、その立場からは、相互の会話を参加者にまかせ、あまり恣意的に座談の方向を定めないということも必要である。司会者としては、この二点を頭において、話題の口切りはするが、大きく話がそれないかぎり、会話の流れの中にはなるべく口を挟まな

いようにしたつもりである。鈴木家、内藤家の皆さんにもそのあたりを説明した上で座談会に入った。(以下両家についてはS家、N家と略する)なお両家族の側から見ると座談の参加者は日常接している家族であり、司会者は初対面の外来者である。したがって、いわば客である司会者に気遣いをして、家族が互いの発言をコントロールしあうということもしばしばあったように思う。それゆえと考えられる話題転換のパターンも見られ、興味深い。

筆者はこのような司会は初めてのことで、意図を十分に果たせたとはいえないが、とにかくそういう性格の座談における話題の転換ということで論を進めていく。

2 話題の展開と提起者

まず、両家それぞれの座談についてどのような話題が、だれの提起によって進んでいくのかを調べた。(表1・2)

表に見るようにS家では1時間40分ほどの座談において11、N家では約2時間半で13の話題が話し合われた。これらそれぞれの話題はさらに短い、いわば小話題とでもいうべきものがいくつか連なることによって構成されている。たとえば、S家の話題③「家族の呼び方」は小話題「家族どうしてどのように呼びあっているか」(53発話)「祖母・母の育った家庭では家族がどのように呼びあっていたか」(13発話)「祖母の育った家庭では呼び方を含め、ことばのしつけにうるさかったこと」(4発話)の合計70発話からなり、次の「家族間でのことばの使い分け」という話題へと展開していく。このような話題ごとに、いくつの小話題からなるか、誰がどのくらい小話題の提起者になっているか、いくつの発話が含まれるか、誰がどのくらい発話しているかをまとめたのが表1(S家)および表2(N家)である。なお、ここでいう「発話」とは「ある人物の発話のはじめから他者に遮られるまでを1発話単位とする」(注)として本資料の文字化の際に定めた基準単位である。発話の長さは一定ではないから、発話数と発言の量は必ずしも一致しない。しかし小論では話題が展開していく中で座談の参加者がどのように発言の意志

(表1) S家の話題の展開と提起者

(K=祖母 C=母 M=娘 S=司会)

話題番号 ・ 内容	小話 題数	小話題の提起者(下段%)				発 話 数	話者ごとの発話数(下段%)			
		K	C	M	S		K	C	M	S
①座談の開始	2	0 0	0 0	0 0	2 100.0	10	3 30.0	2 20.0	1 10.0	4 40.0
②家族の経歴	2	0 0	0 0	0 0	2 100.0	73	22 30.1	21 28.7	3 4.1	27 37.0
③家族の呼び方	3	0 0	0 0	0 0	3 100.0	70	14 20.0	20 28.6	14 20.0	22 31.4
④家族間でのことばの使い分け	13	2 15.4	4 30.8	2 15.4	5 38.5	101	21 20.8	35 34.7	15 14.9	30 29.7
⑤ことばのしつけについて	12	4 33.3	3 25.0	0 0	5 41.7	81	20 24.7	25 30.9	12 14.8	24 29.6
⑥ことばの女らしさについて	18	2 11.1	5 27.8	2 11.1	9 50.0	191	27 14.1	53 27.7	44 23.0	67 35.1
⑦写真を見ての感想	4	1 25.0	0 0	1 25.0	2 50.0	77	22 28.6	21 27.3	22 28.6	12 15.6
⑧録音を聞いての感想	7	2 28.6	1 14.3	0 0	4 57.1	56	12 21.4	17 30.4	6 10.7	21 37.5
⑨ことばと時代の流れ	7	2 28.6	2 28.6	0 0	3 42.9	50	18 36.0	9 18.0	4 8.0	19 38.0
⑩質問用紙を見て答える	15	4 26.7	3 20.0	0 0	8 53.3	160	40 25.0	47 29.4	27 16.9	46 28.8
⑪座談の終わり(挨拶)	3	1 33.3	0 0	0 0	2 66.6	19	3 15.8	6 31.6	0 0	10 52.6
合計 (下段%)	86 100.0	18 20.9	18 20.9	5 5.8	45 52.3	888 100.0	202 22.7	256 28.8	148 16.7	282 31.8

(表2) N家の話題の展開と提起者 (Y=曾祖母 H=祖母 U=母 A=娘 N=父 S=司会)

話題番号 ・ 内容	小話 題数	小話題の提起者 (下段%)						発 話 数	話者ごとの発話数 (下段%)					
		Y	H	U	A	N	S		Y	H	U	A	N	S
①座談の開始 (司会者自己紹介)	10	4 40.0	0 0	1 10.0	0 0	2 20.0	3 30.0	111	26 23.4	9 8.1	16 14.4	1 0.9	23 20.7	36 32.4
②家族の呼び 方の確認	2	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	2 100.0	31	2 6.5	3 9.7	3 9.7	3 9.7	7 22.6	13 41.9
③家族の経歴	37	9 24.3	5 13.5	1 2.7	0 0	3 8.1	19 51.4	451	109 24.2	124 27.5	44 9.8	10 2.2	43 9.5	121 26.8
④家族でどう 呼び合うか	13	2 15.4	3 23.1	0 0	0 0	1 7.7	7 53.8	131	19 14.5	29 22.1	31 23.7	11 8.4	12 9.2	29 22.1
⑤ことばの使 い分けにつ いて	11	4 36.4	1 9.1	2 18.1	0 0	0 0	4 36.4	95	13 13.7	10 10.5	29 30.5	12 12.6	5 5.3	26 27.4
⑥若者のこと ばについて	9	0 0	0 0	0 0	2 22.2	2 22.2	5 55.6	104	3 2.9	10 9.6	17 16.3	26 25.0	16 15.4	32 30.8
⑦ことばの女 らしさ、丁 寧さ、およ びしつけに ついて	18	4 22.2	3 16.7	2 11.1	0 0	1 5.6	8 44.4	145	18 12.4	29 20.0	28 19.3	13 9.0	17 11.7	40 27.6
⑧娘のことば に対する意 識	7	1 14.3	1 14.3	0 0	2 28.6	0 0	3 42.9	57	7 12.3	3 5.3	3 5.3	23 40.4	5 8.8	16 28.1
⑨曾祖母の子 育ての思い 出	5	4 80.0	1 20.0	0 0	0 0	0 0	0 0	29	13 44.8	8 27.6	0 0	2 6.9	2 6.9	4 13.8
⑩写真を見て の感想	14	5 35.7	2 14.3	2 14.3	3 21.4	0 0	2 14.3	120	26 21.7	22 18.3	18 15.0	29 24.2	10 8.3	15 12.5
⑪録音を聞いて の感想	9	0 0	3 33.3	1 11.1	1 11.1	0 0	4 44.4	118	4 3.4	32 27.1	27 22.9	24 20.3	7 5.9	24 20.3
⑫質問用紙を 見て答える	36	8 22.2	4 11.1	3 8.3	3 8.3	0 0	18 50.0	363	38 10.5	80 22.0	65 17.9	51 14.0	14 3.9	115 31.7
⑬座談の 終わ (挨拶)	1	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 100.0	1	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 100.0
合 計 (下段%)	172 100.0	41 23.8	23 13.4	12 7.0	11 6.4	9 5.2	76 44.2	1,756 100.0	278 15.8	359 20.4	281 16.0	205 11.7	161 9.2	472 26.9

を示し、展開にかかわっていくのかを見ることを主目的とするので、この単位を用いることとした。

次に、両家の座談会の各参加者について、発話数に対する話題の提起の発話および、あいづちのみで構成される発話の割合を調べてみた。(表3)

話題の提起とあいづちは談話のなかでいわば、対極的な要素を持っているものといえよう。話題の提起は、自身の関心を相手に表示して聞かせる(聞いてもらう)ことによって談話の内容を直接に決定していくが、あいづちは自分が相手の話を聞いているということを相手に伝えるものであって、あいづちをうつ者がその談話の内容を直接に決定することはない。あいづちに関しては男性よりは女性、少年層よりは壮年層・老年層にその頻度が高く、また、話を引き出すことを目的とした談話においても頻度が高くなり、表現形式が多様になるという報告がある。黒崎(1987)さらに親疎関係でいえば、疎の関係にあるほうが、きちんと聞いているということを表示する必要からあいづちが多くなるともいわれている。杉戸(1987)小論はあいづち研究を目的とするものではないが、各人の発話の構成要素として、あいづちが話題を提起し展開していく他の発話とは、やや異なる位置にあると考え、これに注目してみたのである。なお表3であいづちとしてとりあげたのは「はい」「はあ」「ええ」「うん」「なるほど」「ああ そうですか」などが、単に話を聞いている・わかったという意味において用いられた文からのみなる発話の数

(表3) 各人の発話における話題の提起とあいづちの割合

	S 家				N 家					
	K	C	M	S	Y	H	U	A	N	S
発話数	202	256	148	282	278	359	281	205	161	472
提起数	18	18	5	45	41	23	12	11	9	76
割合(%)	8.9	7.0	3.4	16.0	14.7	6.4	4.3	5.4	5.6	16.1
あいづち	12	10	2	34	2	5	27	9	5	98
割合(%)	5.9	3.9	1.4	12.1	0.7	1.4	9.6	4.4	3.1	20.8

である。あいづちには他に、非言語行動としてのうなずきや笑い、表情などを含めて考えることもあるがここでは問題としない。また他者の発言の繰り返しについても、驚き、強意、念押しなどの意味を含むものとして数えなかった。

表1～3から次のようなことがいえる。

- (1) 司会者Sの発話数はS家、N家とも約1/3を占める。また話題の提起についてもそれぞれの座談のおよそ半分を占めている。これは先にのべたように話題を内容や発言者を指示せざるを得ないという、この座談の性質によるところが大きい。なお両家とも「写真を見ての感想」という話題では、他の参加者に自由に話しあってもらおうよう、司会者として意識したこともあって、司会者の発話は比較的少なくなっている。また司会者自身の発話の数に対する話題の提起の割合はどちらの座談でも約16%ということで、これは司会者自身の司会における位置の定め方、力量などを反映した数字といえるかもしれない。また、あいづちについても司会者は他の参加者に比して圧倒的に多く、話を引き出すことを目的とした談話においてあいづちが多くなるという黒崎（1987）の報告を裏付けている。以上から、司会者の発話においては話題の提起とあいづちが構成要素のかなりの部分を占めると見ることができるだろう。
- (2) S家の祖母K、N家の曾祖母Yはともに80代でそれぞれの座談会の最年長者である。この二人については、いずれも発話の数に対して話題提起の割合が高いことが特徴的である。ことにYの場合は、司会を除く他の参加者に比べても話題の提示が飛び抜けて多く、同時にあいづちの発話がきわめて少ない。人の話を聞いて、それに合わせ答えながら話題を展開するというよりは、自身が思うことを提起して他者に聞かせるという話し方である。年長で、家族に一目置かれているという立場によって、このような話し方が可能なのだと考えられる。ところで、このような話し方は話題が適切に選ばれ提起されているときには他者を引きつけるが、そうでない場合にはうるさがられたり、煙たがられたり、また、その人の発言だけがまわ

りから浮き上がって、他者による話題の軌道修正が繰り返されることにもなりかねない。実際にこの2人の場合どうであるのかについては後に詳しく述べる。

- (3) 座談の第2世代、S家のC(50代)N家のH(60代)は、どちらも、それぞれの座談で、司会者を除けば最も多くの発話をしている。しかしYやKのように話題の提起は行っていない。N家のUについてもこれに近いが、Uの場合特徴的なのはあいづちの割合が高いことである。Uの場合、発話数に対する提起数はN家の中で最も低く、あいづちの割合は最も高い。YやKとは逆に他者の話を聞き、その内容に加わって発言することを中心に発話がなされていることが察せられる。CやHはUほどあいづちは多くないが、どちらかといえばUに近い立場で発言しているといえよう。
- (4) 最も若い世代であるS家のM、N家のAはともに日本語教育を専攻する学生であり、今回の座談の内容についての関心は高いものと思われるが、実際には発話数、提起数とも最も少ない。この原因は定かではないが、一つには「日本語に関して一般の人に聞く」という「専門家」としての司会者の立場を尊重し、また同化したのではないかということが考えられる。両家それぞれの「写真を見ての感想」を話し合うという話題では、司会者が発話を控えたこともあって、家族が比較的自由に話し合っているが、この場面ではM、Aともに発話数が増え、話題の提起も行っている。このこともそれを裏付けているものと思われる。
- (5) NはUの夫、Aの父であり、同席して座談に加わった唯一の男性である。女性三代の話をお聞きしたい、とあらかじめ伝えてあった座談会の意図から、席を外そうとしたが、司会者のほうでお願いして話に参加してもらった。そのような立場を意識してか、発話数も提起の数も比較的少ない。ただ目立つのは、特に座談の始まりから前半にかけての発話、話題の提起が多いことである。ことに座談の最初に司会者がYと同郷であるということから語り起こして自己紹介をする話題①から、曾祖母を中心に家族の経歴が語られる話題③あたりまでは、話されることへの質問や確認など、要所

要所でかなりの発話や話題の提起を行なっている。これはひとつにはNが妻の家族、特に高齢の曾祖母のいわばルーツに興味を持っていることの現れであり、また座談を軌道に載せてスムーズに進行させようという意図が現れているのであろう。

- (6) S家の座談(表1)を見て気づくのは、特に発話数において、K、C、Mの三者がどんな話題においても、同じような割合で発話しているということである。これに対して、N家のほうでは、③「若者のことばについて」や⑩「録音を聞いての感想」のように曾祖母の発話がきわめて少ない話題もある。一方⑨「曾祖母の子育ての思い出」では曾祖母と祖母だけで話のほとんどが進められていく。一つ的话题を構成する小話題の数や発話数についてもN家のほうがばらつきが大きい。これはN家のほうが人数が多いこと、年齢の幅もS家よりは大きく、男性も含まれること、またそれぞれの世代が別の家庭を作っていることなどから参加者の関心や興味が多様で、話題によって参加できる人が限られる場合があるということだろう。しかもN家は実の曾祖母・祖母(曾祖母の長女)・母(祖母の一人娘)・娘(一人っ子)からなる四世代で、意識の面からは非常に親しく遠慮のない関係である。N家の場合、黒崎(1987)に報告されているような年齢・性別とあいづち頻度の相関性はまったく見られないが、これも以上のような座談の状況によるものであろう。

S家の場合は人数の少ない、同居家族であるということとともに、C、Kが嫁姑の関係であることから、Cがかなり意識してKに発話のチャンスを回したり、牽制をしたりして座談をコントロールしている面があるのではないかとその場に参加した司会者としての立場から感じる。Cの場合、話題①「座談の開始」⑨「ことばと時代の流れ」を除く9話題のいずれにおいても全体の30%前後の発話を保っており、自らが全参加者の中でどのような位置におり、どの程度の量発言することが適切かということを見るバランス感覚において非常にすぐれているといえる。もちろんこれは気を使って話している、あるいは話す習慣が身についているということでもあ

ろう。なお、この点については次の項でさらに詳しく触れる。

3 話題の転換のパターン

今回の座談に見られた話題の転換のパターンを司会者、参加者それぞれの立場から整理する。すなわちそれぞれの話題（小話題）の提起の発話とその前の話題（小話題）とどのような関係をもって連なるかを検討してみたのである。

(1) 司会者が行なう話題転換

- ① 新しい話題の提起……座談において、設定された時間の中で話題としたいことのメニューを持っているのは司会者のみである。司会者はメニューにしたがって、また前の話題の途切れたところなどを見計らって新しい話題を提起する。この形はその大半が、「～について（〇〇さんは）どう思われますか。」のような疑問形およびそのバリエーションで行なわれ、その他に「～について伺いたと思います」「～について聞かせてください」などの意志や依頼の表示として行なわれる場合も見られた。また「清美さんはずっと共学ですか」などと一旦確認し、肯定の答えを受けて「学生時代男子生徒のことばをどう感じたか」と新しい話題を提示していく、いわば二段がまえの表現も多く見られる。
- ② 話題の再提起……司会者からある話題が提起されても、参加者がそれを司会者の意図どおりにとらえなかったり、参加者が自身の話したいことにこだわって司会者の提起を受け入れようとしなかった場合などに、話題が司会者の提起とは違った方向に進展したり、進展せず立ち消えになってしまうことがある。この場合司会者はあらためて話題を提起することになるが、司会者の立場として、参加者の話したいことをある程度聞き、話題として発展させた上で再提起を行なうことが多い。提起の表現としては①と同様、疑問、意志、依頼などの形式が見られる。
- ③ 参加者から提起された話題の受容・発展……②と同じく、さまざまな形で参加者から話題が提起される場合がある。司会者はこの場合改めて

自分の意図する話題を提起するのではなく、参加者の提起した話題を受け入れ、その中で語られたことを受けて、次の話題を提起していくこともある。これは座談が進んで、参加者が司会者の意図するところをある程度理解し、相互に打ち解けた会話ができるようになるにつれて可能になってくるものと考えられる。

(2) 参加者が行なう話題転換

① 新しい話題の提起……一般にテーマが定められた中で行なわれる座談において、参加者の側から、まったく新しい話題が提起されることは比較的少ないと考えられる。実際に行なわれた例を検討してみると次のようなものがある。

A 自己固執型……全体の座談の流れとは関係なく、自分のうちにある考えにこだわって、それを提起したり、全体の流れは一応つかんではいるが、自らの関心事にこれをひきつけて、関心のある方向に話題を提起する。たとえばN家の曾祖母Yが、写真を見ての感想を語りあう話題において、「あたしは易をみるけどね…」と、写真の女性のポーズについて易による判断から述べようとした例などがこれにあたる。この発言は話題が本筋からそれると判断したのであろう祖母（Yの娘）Hによって「易をみたら長くなるからおやめになってください」と次の発言への展開を封じられている。なお、このような形で提起された話題であっても、受手の側の発展のさせかたなどによって、座談の流れの中に組み込まれ、次の話題へ発展していくということも、もちろんありうる。

B 誤解型……司会者や他の参加者の提起した話題を誤解して答えたために、座談の流れがそれまでと変わってしまい、結果として新しい話題を提起したような形になったもの。これについても直後に修正される場合と、誤解された流れのままに話題が進展していく場合とがある。

C 茶菓もてなし型……それまでの話題の流れに無関係に提起されるも

のとして「お茶をどうぞ」「お菓子をあがってください」などというもてなし型の話題がある。一般にAのような自己固執的な話題の提起は座談においては避けられたり修正されるが、この話題に限っては避けられる事なく、現行の話題に割り込んで、お茶やお菓子の味に話が及ぶなど話題が展開していくことも認められる。この形の話題の提起（割り込み）が一般に「割り込み」をしない女性に「割り込み」が許される状況の一つとして、男女が混じった会話でも女性にのみ見られるものであることが重光（1993）によって報告されている。なお、この話題は必ずしも参加者の側にのみ見られるものではなく、司会者であれ、参加者であれ、座談の場を提供し、もてなし側になった者によってなされるものであろうと考える。またここに分類されるものとして天候について述べる話題や、「膝を崩してください」と相手にくつろぐことを進める話題の提起などもある。

② 話題の再提起……すでに提起された話題がなんらかの形で中断されたり、あるいは一応の完結を見たあとに再び提起され進行していく場合がある。参加者がかかわることのもっとも多い提起の形である。これにも次のような型が見られた。

A 修正型……参加者のひとりが、先にあげた自己固執型の話題の提起をした場合に他の参加者が次の発言で話題をもとに戻すことがある。司会者の再提起と違うのは修正がただちに行なわれることであり、その結果自己固執型の話題のほうは、いわば無視された形になる。さきにあげたN家のHの発言と同様に、参加者どうしが家族であるということから、外来者である司会者を気遣って行なわれる話題のコントロールの一つであると考えられる。

B 再提起型……以前の提起の中で、意見としてうまく表現できなかったこと、言い落としたこと、付け加えたいことなどを、おりを見てあらためて提示することがある。その場合、どのようなおりを見て、どのような内容を提起するかによって自己固執型と同じく話題の流れか

ら浮き上がり司会者や他の参加者から修正を加えられるということにもなるし、場合によっては、次にあげる③同様に司会者や他の参加者に受け入れられてそれ以前の話題を深めたり、違った視点から見る働きをすることもある。

- ③ 司会者および他の参加者の提示した話題の受容・発展……司会者と同じく、参加者の側も司会者や他の参加者の話題の提起を受けて、その中で語られたことから次の話題を提起することがある。たとえば司会者が参加者のひとりに出した質問をその参加者が理解できないときに、他の参加者が言い換えて質問をしなおすという例などもこれにあたる。その場合、参加者はいわば司会者の補助の役割を果たしているわけだ。
- ④ 話題の並行……参加者がある程度多くなると、一つの話題の進行と並行して他の話題が進行することがある。これは、本来の話題からみれば、いわば「私語」であるが、実際にはそちらの話題が本来の話題にとってかわり座談が進行していくということもよくある。5～6人以上の人々が、特に司会者などをたてずに「雑談」をする、というような場面ではこのような話題の転換は普通のことであろう。今回の座談において、4人で話し合ったS家には見られなかったが、男性を含む6人が話し合ったN家においては、時にこのような例が見られた。

参加者による話題の転換は、すべての参加者が同じように行なうわけではない。座談の目的や先行の話題への理解度や、家族内での立場、司会者との関係意識の差などによってそれぞれが行なう話題の転換のしかたには違った傾向が現れることが考えられる。次にS家、N家それぞれの座談において、各参加者がどのような話題の転換を行なうことが多かったかを見ていく。

(表4・5)

3-1 司会者が行なう話題転換

次に掲げる表4は両家の座談において司会者Sが話題の提起として行なった発話について、前項の分類にしたがって、それぞれがいくつ現れているか

をまとめたものである。

(表4) 司会者の話題提起

		(上段・実数 下段・%)		
	1-①	1-②	1-③	合計
S 家	29	9	7	45
	64.4	20.0	15.6	100.0
N 家	48	10	18	76
	63.2	13.2	23.7	100.0

(注)

1-① 新しい話題の提起の発話
 1-② 話題の再提起の発話
 1-③ 参加者から提起された話題の受容・発展の発話

どちらの座談でも、司会者からの新しい話題の提起①は63～64%と一定している。また参加者の発言を受けて発展させた提起③はN家において多く、これは参加者の発話がS家に比べ多く、しかも多様であったことから、その発言を受け入れるチャンスにも恵まれたこと、またN家の座談会が司会者にとっては2回目のもので、多少慣れたり、リラックスしたことから、参加者の発言を発展させることができたものとみられよう。

S家の場合、話題の再提起の発話②が比較的多いが、これはどういうことか。先にも述べたとおり、話題の再提起に行なわれるのは、最初の提起が参加者に正しく理解されなかったり、話題の展開の中ではじめの意図とは違った方向に話がずれていく場合や、期待する情報が十分には得られていないと司会者が判断した場合などである。つまり再提起がされるについては、かならずそれまでの話題の展開のなかに、その原因があるとみてよい。ただしこのような誤解や話のずれは司会者だけでなく、他の参加者によっても修正されるわけだから、この数字からS家においてこのような誤解やずれが多く生じたとは必ずしもいえない。(これについては次の項で確かめる。)ただはっきりしているのは、このような誤解やずれを修正し、話題の流れを作っていく役割を、S家の座談会において司会者が比較的多く担っているということで、この点で、司会者のS家の座談会に対する関与、話題の支配はN家に比べて強いといえよう。

(表5) 参加者が行なう話題の転換

(上段…実数 下段…%)

		2-①A	2-①B	2-①C	2-②A	2-②B	2-③	2-④	合計
S 家	K	7 43.8	1 6.3	5 31.3	0 0	1 6.3	2 12.5	0 0	16 100.0
	C	3 16.7	0 0	0 0	4 22.2	1 5.6	10 55.6	0 0	18 100.0
	M	1 20.0	0 0	0 0	2 40.0	1 20.0	1 20.0	0 0	5 100.0
	合計	11 28.2	1 2.6	5 12.8	6 15.4	3 7.7	13 33.3	0 0	39 100.0
N 家	Y	21 51.2	1 2.4	1 2.4	2 4.9	10 24.4	6 14.6	0 0	41 100.0
	H	4 17.4	1 4.3	1 4.3	1 4.3	4 17.4	12 52.2	0 0	23 100.0
	U	2 16.7	0 0	2 16.7	3 25.0	1 8.3	4 33.3	0 0	12 100.0
	A	4 36.4	0 0	0 0	1 9.1	2 18.2	2 18.2	2 18.2	11 100.0
	N	1 11.1	0 0	0 0	1 11.1	4 44.4	3 33.3	0 0	9 100.0
	合計	32 33.3	2 2.1	4 4.2	8 8.3	21 21.9	27 28.1	2 2.1	96 100.0

(注)

2-①A 新しい話題の提起……自己固執によるもの

2-①B 新しい話題の提起……誤解によるもの

2-①C 新しい話題の提起……茶菓のもてなし等

2-②A 話題の再提起……他者の提起を修正する

2-②B 話題の再提起……以前に出た提起やその中に含まれた意見を再提起する

2-③ 他者の提起した話題の受容・発展としての提起

2-④ 話題の並行から行なわれる提起

3-2 参加者が行なう話題転換

表5では、司会者を除く参加者が行なった話題転換の発話について、前項の分類にしたがって、それぞれがいくつ現れているかをまとめた。

(自己固執型の話題提起)

S家のK、N家のYについて、発話数の割に話題提起の発話が多いことはすでに指摘した。表5から、さらにその中でも「自己固執型」の話題提起を2人が多く行なっていることがわかる。たとえば、Kの場合、「こどもに対してどのようなことばのしつけをしたか」という司会者の提起に対して、「自分の息子がおとなしい子なので心配した」とか「孫のことばづかいをどう見ているか」という提起に対して「孫が自分にやさしいのでうれしい」というふうに、話題になっていることについて、提起者の意図にそって話すというよりは自分の関心に引き付けて、多少ずれたところで話すという発話がめだつ。しかも例にみるように、客観的な事実としてというより、そこに感じた自分の気持ちを語ることが多い。Yのほうはこのようなことはほとんどないが、自分の経歴、職業経験などについて微に入り細を穿つという具合に、つぎつぎにエピソードを披露したり、「ことば」に関しては方言への興味が強いようで、「場面によることばの使い分けは難しい」という話題がでると、その例として「昔、方言で話す人のことばが聞き取れず困った」と提起するなど方言を話題としようとする傾向が強い。Yの話は具体的で、描写も生き生きとしており、家族も引き込まれて聞いており、曾孫のAは「(歴史の)教科書のことばがそのままここにある感じ」と評価する。実際にはYの話は司会者がこの座談の中で明らかにしたいと考えている問題に必ずしも的確に答えているわけではない。しかし、話のおもしろさで聞かせてしまう、いわゆる「話好きなおばあちゃん」である。Kについてもこのような話題提起の傾向は多少あり、座談の終わりになって「若いとき毎日渋谷で行き合った忠犬ハチ公のこと」とか「セールスにきて歌を聞かせてくれた若者のこと」などがエピソードとして語られている。このような自己固執型の話題提起は、相手が自分の話を聞いてくれる、自分の話にはそれだけの内容があり、ま

た自分にはそれだけの話術があるという自信にの裏付けによってなされているはずだ。KやYの場合は前述のとおり、家族の最年長者として一目おかれ、大切にされているということや、長い人生経験をもっているということがこの自信につながっていると考えられる。したがって、座談のなかでは、年少者や相対的に地位の低い者がこのような話題提起をすることは比較的少ないと考えられるが、実際には両家において最年少のM、Aともに親の世代よりもこの形の話題提起を多く行なっている。これはKやYとは逆に「何を言っても聞いてもらえる最年少者」としての自信が現れているのかもしれない。

ところで、このような自己固執型の話題提起をささえる自信は必ずしも正しいものとはいえない場合も、もちろんある。その場合、話者の話はうさがられ、疎んぜられるということにもなりかねない。自己固執型の話題の提起が相手にどのように受け入れられ、また受け入れられないかということは、話者の座談の中での位置を示す1つのめやすになるだろう。

(誤解による話題の提起)

これについては表5にみるとおり、60代のHより上の世代に各1例ずつ現れている。それ以前の話題の提起の意図を的確に汲み取れなかったのは、自己の関心に固執していたからともいえ、これは自己固執型の話題提起の1つの現れかたと見ることもできる。実際に先に例をあげたKの「解釈のずれ」による話題の提起などは「誤解」の要素を含んでいる。「誤解」の現れる年齢層からいえば、老齢によって若者を含む会話の流れやリズムについて行きにくくなったことが、誤解をもたらすといえそうだ。同時に、それを補うものとして自らが自己の関心にしたがって話題を提起して、その場の会話をリードするという高齢者の話術とでもいうべきものが成立していることもうかがえるのである。

(茶菓のもてなし等)

N家ではこの話題についてはY、H、Uのいわば3人の主婦によって交互

に提起されている。座談会の会場となったのはHの家で、Y、Uはこの家の主婦ではないが、親しい直系の三世代として、3人で客として訪れた司会者をもてなそうとしたのであろう。高齢のYは実際にお茶をいれることはしないが、Uは実家であるこの家の台所をHと同様に使いお茶やお菓子の用意もしている。

いっぽうS家の場合、この形の話題提起はもっぱら祖母のKが行ない、主婦のCから言い出されることはなかった。ただし提起にしたがってお茶を実際に入れるのはCである。実際の接待をする立場にもかかわらず、話題としての提起をしないCのありかたには次の2つの理由が考えられる。1つは姑であるKをたてる気づかいである。これはCのKへの対応全般にみられることである。たとえば「嫁にきてからKにことばづかひのしつけを受けたが、自分たちの世代はしつけを受けていなかったからそれは当然のことであった」「あらたまった手紙を書くときにはKに代筆してもらおう」「おばあちゃんは色彩感覚がすぐれている」などの話題の選び方、Kに対する敬語の使用、また座談の場をKの部屋に設定していることなども含め、姑であるKをこの場の主人としてたてようとしているように思われる。もう1つの理由は、Cが司会者の意図にしたがって座談を進めようという意識を強くもっているのではないかということである。茶菓を進めるということは、しばしばそれ以前の話題を中断することになり、そこから話題が転換していくことも多い。あとにも述べるが、Cは司会者にも気をつかい、そのようなことをさげようとしているのだといえる。

(話題の再提起)

あまりに自己執着が強くて座談から浮き上がったたり、誤解に基づいて提起された話題は普通、修正され、話題をもとに戻すことが行なわれる。修正はすぐに行なわれることもあれば、自己執着や誤解に基づいた話題であってもしばらく進行してから、再提起される場合もある。このような提起(2-②A)を多くしているのはS家のCとM、N家のUである。修正される話題は一般的に自己執着や誤解によって提起されたもの(2-①A、2-①B)で

ある。表5によればS家の場合このような話題が12例あり6例が司会者以外の参加者によって修正され、N家は34例に対して8例が修正されていることになる。この他に司会者が修正を加える場合もあり、実際にS家の座談においては司会者の修正が多く行なわれていることはすでに述べた。同時にC、Mにも座談の流れを司会者の最初の意図にそって「正しく」保とうとする意識が強いということになる。この場合修正される話題提起の大半は祖母Kによるものである。たとえばCの行なっている修正の話題提起4例はすべてKが行なった話題提起に対するもので、しかもそのうち3例については、Kの提起の直後、誰の返答もないうちに修正が行なわれている。このような司会者、参加者両方からの強い働きかけによってS家の座談は、最初に司会者が思い描いたプログラムから大きくはずれることなく、短時間で能率のよい話し合いができたというわけである。

いっぽう、N家の参加者の場合、他者の話題を修正し、座談の流れを「正しく」保とうとする意志はさほど強くはないようだ。これは参加者が多くて話題の流れを一本に絞ること自体が行なわれにくいこと（文字化はできなかったが、N家の場合、話題の進行の外でいわゆる私語的な会話を参加者の一部がかかわっているということがかなりあり、そちらの話題が全体に取り入れられて本筋の話題になるということも2例ほどだけ見られた。(2-④) また自己固執的な話題を主に提起しているYの話が、話題の本筋からそれてはいても話としておもしろく人をひきつけることから、このような修正があまり行なわれなかったのだと考えられる。

(他者の話題の受容・発展としての話題提起)

この話題提起が多いのはS家のC、N家のH、U、Nで、いずれも参加者の中の中間世代である。この話題提起は、それまでの話題の流れや直前の話者の意見を理解し、この後話題をどのような方向に進行させるかを予測しながら、直前の話者の意見を組み入れて行なわれなければならない。自己固執型の話題提起とは対極をなすものといえるから、K、Y、M、Aなどに比較的少ないのは当然といえよう。

4 まとめ

以上、座談会に実際に連なった司会者としての立場から、各参加者がどのような立場や意識をもって座談に加わり、それが話題の転換にどのように現れているかを見てきた。

どちらの座談にも次のことが共通していえる。まず、高齢の祖母・曾祖母の世代はあまり全体の流れにこだわらず（こだわらず）自身の関心を中心に話題を提起している。中間の世代は意識して他者の話を聞き、司会者の意図を尊重しようとし、また他者の発言を促したりと、まわりを意識した話題の転換を行なって、いわば座を取り持とうとしている。最も若い世代は発話量も話題の提起も比較的少なく、「おとなしい」という感じだが、自己固執的な話題の提起の割合は、中間世代に比べて高く、「口数は少ないが言いたいことは言う」傾向にある。ただし、これは家族の中での会話で、甘えを許され、聞いてもらえるという自信に裏打ちされていることであろう。また、中間世代のように、まわりに合わせ、気づかいをした話題の提起ができないという言語技術上の未成熟ということも考えられる。

「気をつかう」という意味では、ことにS家の主婦である50代のCの話題の転換には、表現形式として現れたもの以上に、さまざまな気づかいがあるように思われる。特に姑としてのKとの関係では、気づかいをし、たてながら、同時にKの誤解や、自己固執的な発言をきっちり訂正していくことによって力の拮抗を保っているような面もある。司会者に対しては非常に協力的で、他の家族との間に立って座を取り持とうとする。職業を持たず、主婦として家庭にあって、姑と暮らすという立場によって身につけた気づかいが話題の展開のしかたにも現れているのであろう。このあたりについては、今後もう少し詳しく分析してみたいと思っている。

(注) 「資料・女性のことばと世代 — 鈴木さん一家 — 」小林美恵子
『ことば』13号1992・12

(参考文献)

- 黒崎 良昭 (1987) 「談話進行上の相づちの運用と機能 — 兵庫県滝野方言について —」 (『国語学』150)
- 杉戸 清樹 (1987) 「発話のうけつぎ」 (『談話行動の諸相 — 座談資料の分析 —』三省堂)
- 重光 由加 (1993) 「会話のパターン」 (『日本語学』5月臨増号 世界の女性語・日本の女性語)